



高知大学
Kochi University

All roads *lead* to the future リード

Lead

コミュニケーションペーパー
2017 秋号
Autumn

¥0
TAKE FREE

〈特集〉

食生活と ストレスの関係を 深〜く探る

まなびの時間

共通教育授業
「みのまわりの科学」

Labo通信

謎めく「魚の感染症」を解き明かす

ぼくらのキャンパスライフ

山や雪原、南の海で感動体験!

ワンダーフォーゲル部

Action! 地域×高知大学

生産者と市場をつなぐために
株式会社「里人」をつくりました!

高知大学ニュース

「食欲の秋」真つただ中でもストレスが多くてあまり食欲がない…。こんな人に知ってもらいたい、食生活とストレスに関する柴先生の研究を紹介します。

質問票と測定機器により ストレスを数値化

友人との関係がこじれて、食欲が湧かない。トラブル続きで、胃がキリキリする。腹の立つことがあつて、つい食べ過ぎてしまう…。こういった経験をしたことはありませんか？誰もが何となく感じているストレスと食生活の結びつき。この関係性を研究テーマにしているのが、教育学部講師の柴英里先生です。

「良い食生活の在り方について考える場合、食生活とストレスは関係が深い。生活全体を見る必要があり。なかでも、食生活と強く関係している要素をいえる、やはりストレスでしょう。そこで、食生活とストレスの関係につ

ストレスにさらされると、 食事の量も質も変化 する！

柴先生は研究の第1歩として、ストレスの数値化に取り組みました。調査方法の1つは主観的な測定。被験者である学生らに様々な質問をし、日頃ストレスをどの程度感じているのかを判定する方法です。もう1つは測定機器を使った調査。心電波と脈波（心拍に伴う脈拍の変化）を測定し、その揺らぎなどから、自律神経機能が正常なのか、弱まっているのかを評価しました。



脈波によるストレス測定機器

「まずわかったのは、ストレスによって、食事の量が変わるということです。4割以上の人の食事量が増える一方で、その逆に少なくなるという人も相当数にのびりました。また、ストレスが増えると間食が増える、と答えた人も4割以上いました」

ストレスがあつても食生活は変わらないと答えた人も2〜3割程度はいたとのこと。とはいえ、ストレスに左右されるほうが多数派でした。「もしかしらば、ストレスは食生活をあまり望ましくない方向に変えやすいのかもしれない」と柴先生は推測します。

調査の結果、もう1つ明らかになったのが、ストレスは食事の「量」だけではなく、

〈特集〉

食生活と ストレスの

関係を深く探る



「質」も変えやすいということ。ストレスの多い時、何を食べてくなりますかという質問に、多くの被験者が生クリームたっぷりのスイーツやチョコレート、こつりしたラーメン、唐揚げなどと答えたのです。

「砂糖や糖質が多くて甘いもの、逆に塩味の強いもの、加えて脂肪分が組み合わさったものが多くあげられています。1人ひとりが好きな食べものにはもつとバラエティがあるはずですよ。でも、ストレスがたまつた時には、たとえ普段は好きでなかったとしても、こうしたものを食べたくなるようです」

その理由については、「推測ですが」と前置きしたうえで、糖や脂肪は「おいしい」と感じやすいので、ストレスを緩和する可能性があるかもしれないとのこと。また、ストレスが多い時は何らかの「踏ん張り」が必要になるので、高カロリーのものが必要とされることも考えられるそうです。

腸内環境を良くすると、 ストレスを感じにくい？！



柴先生の調査ではほかに、「食事の満足度が高い人はストレス対処能力が高い」「乳製品をよくとっている人はストレスが少ない」といった結果も出ています。「食生活でストレスをコントロールできたなら一番いいのではないかと、思つて研究を進めています。プロバイオティクスのほかにも、アプローチの仕方はいろいろあるはずですよ」と柴先生は力強く語ります。切つても切れない間柄にある、食生活とストレス。その関係性を解き明かすべく、柴先生の研究は続きます。



教育学部 人文社会科学系
教育学部 講師

柴 英里

広島大学医学部総合薬学科卒業。
広島大学大学院医歯薬学総合研究
科博士課程前期修了。同大学大学
院教育学研究科博士課程後期修
了。博士(教育学)。専門は食健康科
学。高知大学には2011年に赴任。
「高知は良い食生活ができるため
の食材が豊富。釜揚げちりめんじゃ
このおいしさには感動しました！」



「是」か「非」かの 両面から物事を考えることで身につく力 共通教育「みのまわりの科学」

高知の環境問題を通して グループワークを学ぶ

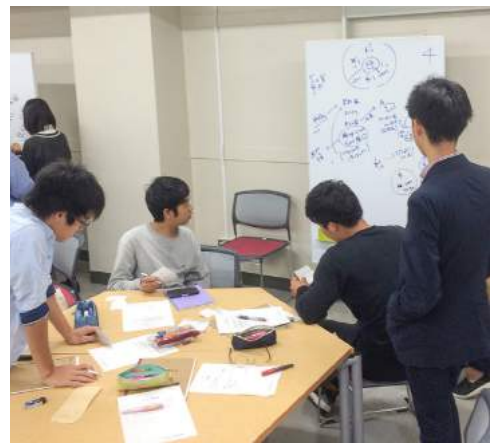
「面倒くさい但也有りますが、すべて自分の力になります」「単位を取りたいだけなら、この授業はやめておいてください。でも、高知大学に入つて、一番面白かったと思う授業です」。そんな受講生の感想が寄せられている講義が、第2学期に開講する共通教育「みのまわりの科学」です。

『みのまわりの科学』は、ディベートによって高知の環境問題の真の姿を探る、PBL (Problem Based Learning) という課題探求型の授業です。受講生はグループに分かれてテーマを決め、課題解決にグループワークで取り組みます。テーマは、高知の自然に関係し、なおかつ是非かの二面性を持っている、という条件を満たしていなければいけません」と、授業を担当する立川明先生は説明します。

環境問題というと地球温暖化などに目が行きがちです。しかし、それだけではないことを、アイスブレイキング(気軽に話し合える雰囲気を作り出すコミュニケーション促進のためのグループワーク)やブレインストーミング(参加者が自由に意見を述べることで多彩なアイデアを得るための会議法)を通じて、学生たちは考えます。こうした学びにより、環境のなかには、体内やキャンパスの環境も含まれることなどに気づいていきます。

「過去には、体内環境ということで腸内細菌について調べたグループがありました。腸内

細菌を活性化するメニューを考えて、期間限定で学食で出したこともあるんですよ。昨年は、人類にとって菌類は味方なのか敵なのかというテーマで、発酵食品を取り上げたグループもありました」



グループで自主的に進める 時間外学習の狙いとは

テーマを決めるうえでポイントになるのが、二面性です。学生は賛成派と反対派の両方の立場からテーマにアプローチし、ディベート的に結論を導き出すことが課せられています。

「二面性にこだわらる理由は、批判的思考力を養ってほしいからです。私はもともと化学を専攻していたので、テレビのCMなどを見ていると間違えた情報もあることがわかりました。世の中に流れる情報は、決して正解だけではありません。そういうことに騙されないようにするためには、いい面ばかりだけでなく、反対側の立場から見ることができるようになることも大切だと思います」

グループごとにテーマが決まったら、そこから先は講義時間外に集まって、調べ学習などを行い、グループで自主的に学習を進めていきます。

「講義時間だけでは収まらないのが、『面倒くさい』といわれるゆえんでしょう(笑)。でも、ここが大事。学生に時間外学習をしてもらうのが狙いなんです。大学の単位は本来、講義の時間プラス自習時間を含めたものであると定められています。しかし、実際は自習をしている学生は少ない。このため、どうすれば単位として認め

義でグループワークを

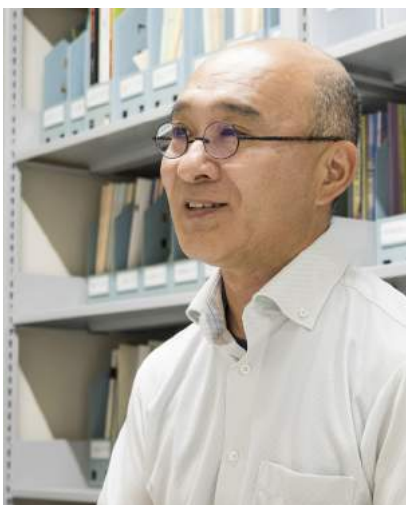
学んでいることもあり、大学生よりもグループワークに長けているとか。『それでも、そこは大学生。講義の回を重ねると逆転するので、高校生に対して助言するようになります』と、立川先生は互いに刺激しあう関係性に、高校生が授業に参加することの効果を感じているそうです。

講義も時間外も充実している『みのまわりの科学』は、受講後、学びの姿勢が変わると学生たちに好評です。加えて、キャリア支援の要素もふんだんに含まれているので、社会人基礎力も身につきます。グループでひとつのテーマに向き合えば可能性が広がることを、『みのまわりの科学』で実感してみませんか？

教育研究部 総合科学系
地域協働教育学部 准教授

たつかわ あきら
立川 明

大分県出身。高知大学理学部化学科卒業。九州大学総合理工学研究科修了。工学博士(九州大学)。1989年、高知大学に着任。『もともと、理科の教師になりたいと思っていたんです。そんなこともあって、現在は高等教育の改善に関する研究を行っています。『みのまわりの科学』の講義も自由に参観できるようにしているので、先生方の講義の参考にしたいと思います」



「面倒くさい但也有りますが、すべて自分の力になります」「単位を取りたいだけなら、この授業はやめておいてください。でも、高知大学に入つて、一番面白かったと思う授業です」。そんな受講生の感想が寄せられている講義が、第2学期に開講する共通教育「みのまわりの科学」です。

『みのまわりの科学』は、ディベートによって高知の環境問題の真の姿を探る、PBL (Problem Based Learning) という課題探求型の授業です。受講生はグループに分かれてテーマを決め、課題解決にグループワークで取り組みます。テーマは、高知の自然に関係し、なおかつ是非かの二面性を持っている、という条件を満たしていなければいけません」と、授業を担当する立川明先生は説明します。

環境問題というと地球温暖化などに目が行きがちです。しかし、それだけではないことを、アイスブレイキング(気軽に話し合える雰囲気を作り出すコミュニケーション促進のためのグループワーク)やブレインストーミング(参加者が自由に意見を述べることで多彩なアイデアを得るための会議法)を通じて、学生たちは考えます。こうした学びにより、環境のなかには、体内やキャンパスの環境も含まれることなどに気づいていきます。

「過去には、体内環境ということで腸内細菌について調べたグループがありました。腸内

「面倒くさい但也有りますが、すべて自分の力になります」「単位を取りたいだけなら、この授業はやめておいてください。でも、高知大学に入つて、一番面白かったと思う授業です」。そんな受講生の感想が寄せられている講義が、第2学期に開講する共通教育「みのまわりの科学」です。

『みのまわりの科学』は、ディベートによって高知の環境問題の真の姿を探る、PBL (Problem Based Learning) という課題探求型の授業です。受講生はグループに分かれてテーマを決め、課題解決にグループワークで取り組みます。テーマは、高知の自然に関係し、なおかつ是非かの二面性を持っている、という条件を満たしていなければいけません」と、授業を担当する立川明先生は説明します。

環境問題というと地球温暖化などに目が行きがちです。しかし、それだけではないことを、アイスブレイキング(気軽に話し合える雰囲気を作り出すコミュニケーション促進のためのグループワーク)やブレインストーミング(参加者が自由に意見を述べることで多彩なアイデアを得るための会議法)を通じて、学生たちは考えます。こうした学びにより、環境のなかには、体内やキャンパスの環境も含まれることなどに気づいていきます。

ビブリオバトルや高校生参加など 盛りだくさんの授業内容

課題に取り組むのは講義時間外が中心。では、授業中は何をやっているのでしょうか。

「課題の中間報告なども行いますが、多くは課題解決に必要な評価的思考やチームワーク力を高めるようなことを行います。例えば、『チームビルディングゲーム』。簡単なゲームにグループで取り組んで、みんなで協力して成果を上げて、チームワークの大切さをゲームで体験するものです」

そのほかにも、順番におすすめの本を紹介し、読みたくなった紹介者を投票で決める『ビブリオバトル』でプレゼンテーション力を磨いたり、決められたテーマに関するディベートを行って、説得力のある討論の仕方を学んだりします。

もうひとつ、この講義のユニークな点は、高次連携事業の一環として高校生が受講していることです。高校生は第1学期の大学の講

謎めく「魚の感染症」を解き明かす

「山」の「口」の「魚」の「部」

水族病理学研究室

教員 今城雅之 × 学生 山下はづきさん

水族病理学研究室では、どういった研究をしているのでしょうか？

今城 ウイルスや細菌、寄生虫などの微生物が引き起こす魚の感染症の研究をしています。これら病原体の多くが人には感染しないこともあって、一般的にはあまり知られていません。しかし、養殖現場などで発生すると、大きな経済的損失を生んでしまいます。自分の研究によってそうした状況を回避できるかもしれない。研究成果をダイレクトな形で現場に還元できることもやりがいのある研究分野だと思っています。

山下さんがこの研究室で学ぼうと思った理由は何か？

山 私は生き物、特に魚に関する勉強をしたいという思いから、海洋生物生産

私ほど現場に出ている研究者はいません！

教育学部自然科学系農学部 今城 雅之
高知県出身。高知大学農学部卒業、愛媛大学博士課程修了、博士（農学・医学）。養殖の感染症専門で、河川にはまったく縁がなかったが、いまは鏡川や四万十川などを研究のフィールドとする。「アユの陸封化が10年近く継続しているのは鏡川の他に事例がない。」

高知の川から、アユの冷水病をなくせ！



冷水病を発症したアユ



「魚のお医者さん」を目指していきます！

「アユの冷水病」といえば、いろいろな河川で大きな問題になったのでは？

今城 冷水病は1990年代以降、全国各地の河川に広まりました。傷口などから感染する致死性の感染症で、特にアユに多く起こります。冷水病菌を保有した琵琶湖産アユの放流が原因とされていますが、鏡川では2012年から、県内産の人工海産アユを放流しています。にもかかわらず、その後も冷水病が発生している。何が原因か調べてほしいという依頼でした。特に2014年にはアユが大量死して深刻な問題となり、記憶に新しいところです。

から、DNAを抽出する作業などを行います。なかなか根気がいるので、最近忍耐力がついてきたような気がします。笑。フィールドに出ることも多く、漁協の方にアユの友釣りを見せてもらったこともあります。今城 高知はフィールドが目の前にありますから、学を出て他の研究者と話をしたときに痛感しますが、私は現場に出ている研究者はいません。魚の病気の研究は、サンプルを送ってもらってラボにこもって調べるのが普通なんです。でも、ここでは研究室から鏡川に行き、帰ってきた瞬間、研究の場として本当に素晴らしいと思います。

「これからの目標を教えてください。」

今城 現場で困っていることを聞き、研究して形にしていこう。いまやっているのが、まさに私のやりたかった研究なんです。鏡川については、昨年9月にアユ漁解禁日の前倒しによる冷水病対策を盛り込んだ「鏡川水系環境保全対策に関する提言書」を県と市に提言しました。これは大きな一歩ですが、今後もより有効な冷水病対策を提案できるよう、研究を継続していきたいと思っています。

山 私は大学院に進もうと考えています。そして将来は、高知の水産業を支えていきたい。自分の研究によって放流のやり方をより良いものに変えられるかもしれない、それがアユの冷水病などの減少につながればと思うので研究を続けていきます。

ぼくらのキャンパスライフ
高知大生の今にエール！

山や雪原、南の島で感動体験！

40キロを背負って、大学周辺を歩くのが練習

ドイツで始まった野外活動「ワンダーフォーゲル」。日本では主に大学のサークル活動として行われてきました。

高知大学ワンダーフォーゲル部（通称・ワンゲル部）の歴史は半世紀以上！56代主将の3年生、宮城孝彰さんによると、「普段は登山を中心に活動しています。トレーニングは週3回で、登山用のザックに砂袋などを詰めて背負い、大学周辺の山などを歩いていきます。このザックの重さは40キロ以上とか。すごい体力が必要ですが、「慣れたら平気。散歩のようなもので、普通に話をしながら歩けますよ」と笑顔で話します。

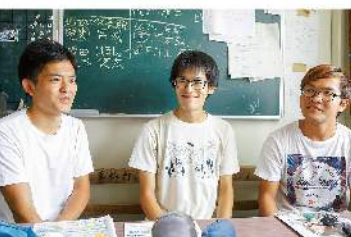
週末は1泊2日で山登り。テントなどの装備を皆で背負って、四国山地を歩きます。さらに春休みと夏休みには、1週間



ワンダーフォーゲル部

ほどかけて四国外に遠征。北・南アルプス登山、沖縄の島歩きなどにチャレンジします。

大学の行事にも積極的に参加。なかでも毎年12月の「学長杯争奪駅伝大会」には2チームでエントリー。「1チームは『ガチ』で走り、もう1チームはキスリングという、昔使われていたレトロな布製ザックを背負い、部の旗を持って走ります」とのこと。かなりの目立ち方で、駅伝の名物的な存在になっているそうです。



▲主な登山用具

「夏合宿で人生が変わる」先輩の言葉は本当だった！

今回インタビューに答えてくれたのは、宮城主将プラス2名の部員。皆さんに、ワンゲル部の活動で得たものや今後の目標を聞きました。

「夏合宿に行ったら人生が変わる」と先輩に言われていましたが、本当にそうでした。3000mを超える山にしかない雄大な景色や空気感は最高です！と目を輝かせるのは宮城さん。サバイバルの技術も身についたそうで、「高知では南海トラフ地震などの不安もあるので、とても役に立つと思います」と話します。宮城さんと同じ3年生の石井琢也さん。遠征で最も強い印象を受けたのは「1年生の春休みに行った宗谷岬。まだまだ冬で、マイナス20度近い雪道を何日も歩いて……。すごく寒かったんですが、めったにできない経験をするのができました」。この時、物好きな学生たちが四国から合宿に来ていて、地元新聞の取材を受け、記事になったそうです。

2年生の河本大和さんは「頂上から富士山を一望した南アルプスの仙丈ヶ岳、流水で真っ白なオホーツク海など、素晴らしい風景をたくさん見ることができました。鳥取出身なので、いずれ大山に遠征してみたいですね」と語ります。じつは入部時、ちよっと太り気味でしたが、日頃の練習の

秋の山登りは石鎚山と剣山がオススメ！



現在、メンバーは約20名で、四国の山をメインに、北海道から沖縄まで全国をフィールドに活動。他大学との交流も盛んで、毎年秋、中四国の大学のワンゲル部が集う「中四国合同ワンデリング」に参加。イベントを楽しみながら、活動や装備などの情報交換を行っている。

右：石井琢也さん（理学部理学科3年）
中央：宮城孝彰さん（人文学部人間文化学科3年）
左：河本大和さん（教育学部学校教育養成課程2年）



神尾 店のスタッフの中で、問題が起きた時の対処法を共有できるようにしました。具体的には「LINE」を使って、問題点をリアルタイムで共有しています。当初は個人個人が現場での判断で動いていましたが、問題の共有化によって経験値がスタッフ

——オープンから今日まで、変わったことはありますか？

神尾 店のスタッフの中で、問題が起きた時の対処法を共有できるようにしました。具体的には「LINE」を使って、問題点をリアルタイムで共有しています。当初は個人個人が現場での判断で動いていましたが、問題の共有化によって経験値がスタッフ

高知大学の学生がやっている、という興味から来てくれるお客様も多いです。地域の高齢者の方にも利用していただいています。接客では料理の感想を聞くことなどを心がけ、お客様とのコミュニケーションを図っています。厨房やホールのスタッフと話し合い、会社の目指していることを自分なりに解釈して、このような接客スタイルになりました。一般の飲食店との違いだと思います。

神尾 私はアルバイトとしてホールで接客を担当しています。お客様からは様々な感想やご意見をいただきます。「おいしかった」と言っていただけでもうれしいです。こういった方が多いと教えてもらっている、という興味から来てくれるお客様も多いです。地域の

——カフェのオープンから2か月たちますが、お客様の反応はどうですか？

神尾 私はアルバイトとしてホールで接客を担当しています。お客様からは様々な感想やご意見をいただきます。「おいしかった」と言っていただけでもうれしいです。こういった方が多いと教えてもらっている、という興味から来てくれるお客様も多いです。地域の

お客さんとの会話も
カフェの持ち味



生産者と消費者をつなぐために

株式会社「里人」 つくりました!

地域協働学部発
(株)里人の挑戦



2017年春、地域協働学部の学生と教員が出資して、株式会社「里人」(さとびと)を設立しました。

大学で、なぜ会社?何をやるの?そんな疑問がわいてきます。そこで、同社代表取締役の辻田宏副学長と、学生で唯一の取締役である大道健太さん(地域協働学部3年)、同社が運営するカフェでホールを担当する神尾はなさん(地域協働学部3年)に、「里人」の活動について話を聞きました。



コミュニケーションに
成長へのヒントが
あると思います

地域協働学部3年
かみ お
神尾 はな

高知県出身。「Satobito」での仕事は、アルバイトというよりも、半分、実習をやっているような気分です。食材が足りなくなると調達がダッシュ!、なんて困ったことも多いですが、やりがいを感じています」



みんなのものになり、お店としても成長していると思います。
辻田 私たち教員が大人の視点で「こうしなさい」と指導して、改善できる部分はあります。しかし、カフェ運営も教育の場という側面を持っているので、指導するのをぐっと我慢。学生たちがアルバイトや社員といった立場を超えて、自分たちの店として自主的に問題点を発見し出し、料理や接客の水準を上げていくことが学びになります。

課題の連続!
それが成長につながる



——現在、会社はどのような状況ですか？

大道 学生が主体的に経営することを理念とする会社なので、学生が自らの考えで動かなければなりません。しかし新しい会社なのでマニュアルがなく、しかも自分自身、どんなことに何をしなければならぬかという知識もない。あらゆることを模索しながら動いているので、いろいろな業務に時間がかかっている状況です。

辻田 会社やカフェの業務に携わって、いまはいろいろな課題が見えてきた段階です。これが本当の始まりですね。この事業では、すでに引かれたレールを走るのではなく、未知の課題を一つひとつクリアしていかなければなりません。そう考えると、ワクワクしてきませんか。学生たちにとっても、成長に向けた大きなチャンスだと思っています。

——これから、会社をどのように運営していきますか？

大道 いまは、自転車操業のような状況なので、まずはその点を改善したいと思っています。また、経験不足を理由にマニュアル作りが進んでいないと、せっかくの学びの機会を喪失しているところがあります。会社を学びの場として活用できるようにしていきたいです。

現在は収益も目標は上がっていませんが、様々な努力が必要です。ただ、こういう状況が、逆に面白いと感じています。どうやって打開するかというのが一番の学びなので、この状況を活かすことが、人材育成という会社の理念にも合致すると思います。

株式会社「里人」が掲げる
3つのミッションとは



——会社をつくったきっかけは？

辻田 地域協働学部では、県内の様々な場所で行っています。そのなかで、生産したものが確実に収益につながるようになってほしい、という希望を生産者さんから聞きました。そこで、生産者と市場や消費者をつなぐ仕組みを作るためにどうすればいいか、学生や教員と検討を重ね、会社を設立しようということになったわけです。現在、4名の学生と11名の教員が出資しています。

株式会社なので、もちろん収益を上げなければいけません。この取り組みにはそれ以外に3つのミッションがあります。1つ目は地域貢献です。地域の産品を我々が仕入れることにより、生産者は収益を得ることができ、2つ目は、地域の宣伝役になり、産地や商品を知ってもらうことです。そして3つ目が、学生の教育の場です。実際のビジネスに近い世界を作ること、授業ではできない実践の機会を得ることができると考えています。収益を上げるという目的がある株式会社を、きちんと収支を踏まえながら学生の手で運営する。その過程で学生が成長し、ひいては地域協働学部が目指す地域人材の育成につながるのではないかと考えます。



大量の
ブルーベリーワイン

「里人」は、授業では
得られない社会的実践や経験を
学生に提供しています

高知大学副学長(総務担当)
教育研究部総合科学系
地域協働教育学部門教授

つじ た 宏
辻田 宏

愛媛県出身。筑波大学大学院体育研究科修士課程修了。同大学院体育科学研究科博士課程単位取得退学。体育学修士。専門の研究分野は、スポーツ学・スポーツ政策論。「産直コーナーでは生産者のチェックが欠かせません。地域の優れた産品をもっと発掘したいですね」



——実際に里人はどのような活動をしていますか？

大道 6月24日に朝倉キャンパス近くにオープンした「satobito」というカフェの営業が事業の柱です。県産食材を使ったランチやモーニング、アイスクリームなどを販売しています。学生が調理から接客まで、すべて担当しています。また、大豊のブルーベリーを加工したブルーベリーワインも当社でプロデュースしました。

しかし、飲食業だけでは経営的に難しいし、より広く地域の産品を知ってもらいたいという思いもあります。そのため、今後はインターネットなどを活用し、地域産品の取扱品目を広げつつ、市場拡大していきたいと思っています。

課題をどうやって
打開するのが
一番の学びです

地域協働学部3年
だい どう けん た
大道 健太

三重県出身。「会社やカフェの運営は学んだことのない領域で、知らなかったことが次から次へと飛び出てきて面白いです。大変なことも多いですが、楽しさながら学べていると思います。」



弓道部が第61回西日本学生弓道選手権大会で男子団体と個人で優勝しました

7月1日～2日に、佐賀県で開催された「第61回西日本学生弓道選手権大会」において、弓道部は男子団体で優勝しました。予選を通過し、決勝リーグでは6勝1敗の初優勝です。また、男子個人では、理学部3年の栗栖潮さんが優勝を果たしました。

優勝した弓道部▶



第51回全日本女子学生剣道選手権大会で剣道部創部以来初の女子個人戦ベスト8入り及び敢闘賞を受賞

中四国代表として出場した剣道部の神崎陽子さん(人文社会科学部2年、中四国大会：優勝)がベスト8入り、敢闘賞を受賞しました。



出場した神崎さん／人文社会科学部2年、中国四国大会：優勝(左) 吉田さん／教育学部2年、中国四国大会：第3位(右)▶

第44回中四国女子学生剣道優勝大会で準優勝優秀選手賞を受賞

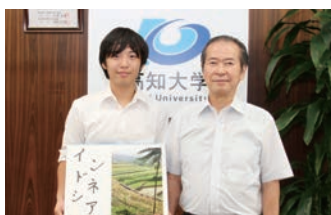
女子剣道部が準優勝、國澤華佳さん(教育学部3年)が優秀選手賞を受賞しました。



國澤さん／(右から5番目)▶

「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム」第7期派遣留学生に採択

「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」第7期派遣留学生(理系、複合・融合系人材コース)に、農学部農学科3年の佐々木周さんが採択されました。佐々木さんの留学計画は、「アジアの稲作を先導！稲の環境ストレスに挑み食糧危機解決を目指す」という夢の実現のために、インドネシアの農村でのフィールドワークやボゴール農業大学での研究など約10ヶ月間活動を行うというものです。



高知大学修学支援基金 への寄附のお願い

本基金は、修学意欲を持ちながら、厳しい家計状況によりそれを断念せざるを得ない学生に対して給付する奨学金として活用します。「高知大学修学支援基金」及び「高知大学さきがけ志金」(教育・研究・社会貢献活動による支援)に寄附を行う際に、インターネット決済サービスによる「クレジットカード決済」、「コンビニ決済」、「Pay-easy決済」がご利用いただけます。

問い合わせ先／高知大学総務部総務課
TEL:088-844-8100 FAX:088-844-8738
E-mail: sj02@kochi-u.ac.jp
URL: http://www.kochi-u.ac.jp/shugaku-kikin/



「第64回よさこい祭り」に高知大学生チームが出場

南国高知夏の祭典、本場の「よさこい祭り」が、8月9日の前夜祭を皮切りに10日・11日の本祭、12日の後夜祭と全国大会が開催され、高知大学生チームを含め、県内外、海外からも合わせて総勢205チーム、約1万8000人の踊り子が、高知市内16会場で舞い踊りました。

64回目の今年は、高知大学生チームは総勢8チーム(叢雲、粋恋、旅鯨人、醫、南溟寮、南風、日章踊り子隊、炎)と全国に散らばったOB中心のチーム(青ノ春)が、よさこい祭りを織り成す個性溢れる五つの要素である地方車(チームを先導するトラック)、音楽、衣装、鳴子、踊りを披露しました。幕末の坂本龍馬をイメージした衣装に身を包んだチーム、伝統のエコなブルーシートの地方車と寮歌も入る男子寮チーム、踊り子それぞれが個性溢れるチーム、県内の学生連合チームなどが、熱気と声援の中、はじける笑顔で舞い踊り会場を盛り上げました。



▲炎～ほむら～



▲南溟寮(なんめいりょう)



▲叢雲(むらくも)



▲南風～ばいかじ～

「第10回演習林トレイルランニングレース」を開催

7月2日、10回目の大会が行われ、30kmのミドルコースと15kmのショートコースの2つの部門に、県内外から265名が参加し、健脚を競いました。同大会は、登山道や林道など起伏の激しい演習林(高知県嶺北フィールド)の山中を走り、日頃、森林・林業に馴染みのない人にも森林に関心を持つきっかけになること、演習林実習や森林管理施業時以外は利用されない林道をスポーツに活用することで山間地の活性化に繋がることを期待して開催しています。

雄大な景観の中、枯れ枝や倒木、沢、獣が通る細い急斜面を駆け抜け、気温が高く、汗だくになりながらもミドルコースは48名が、ショートコースは166名が完走し、達成感と心地良い疲労感を味わいました。



国際シンポジウムで黒潮圏諸国の研究者と学生が熱い議論

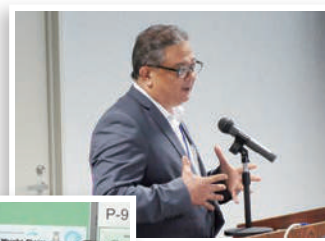
7月23日から27日に「第11回黒潮圏科学国際シンポジウム」を朝倉キャンパスで開催し、106名(うち海外33名)が参加しました。このシンポジウムは、分野横断型教育研究を推進している大学院総合人間自然科学研究科黒潮圏総合科学専攻・総合科学系黒潮圏科学部門が主催するもので、平成19年からフィリピンや台湾、インドネシアの協定校と協同して各国持ち回りで開催しています。シンポジウムのメインテーマは、「黒潮圏科学に基づく研究・教育のための国際ネットワーク構築の展望」で、各国の学生による沿岸域のプラスチック汚染問題をテーマにした討議や、横浜国立大学の松田裕之教授、ピコル大学副学長のビクター・ソリマン教授、本学の深見公雄教授の基調講演のほか、一般講演では、陸域から海域までの生態系やその保全、人々の暮らしや資源利用など多岐に渡る研究成果が発表されました。エクスカーションでは、黒潮圏総合科学専攻の学生が代表を務める地下海水による海藻の陸上養殖事業を展開する「合同会社シーベジタブル」や室戸世界ジオパークを見学しました。



▲海藻の陸上養殖事業見学



▲シンポジウム開会式で挨拶する協口学長



▲基調講演を行うピコル大学 副学長ソリマン教授



▲フィリピン、台湾、日本の学生の交流の場

海外協定校の学生を対象としたサマープログラムを実施

協定校からの短期留学生を約5週間にわたって受け入れる「サマープログラム」を7月4日～8月5日に実施し、米国3大学(カリフォルニア州立大学フレズノ校、テキサス大学ダラス校、ロードアイランド大学)から計19名が参加しました。同プログラムは、国際連携推進センターと土佐さきがけプログラム国際人材育成コースが共同で受入れ・実施を担当し長期留学のきっかけ作りとして日本語や日本文化、高知に関心をもってもらうことを目的に平成28年度から実施しています。授業はすべて英語で行っており、参加する高知大学生にとっては、国際共修の場になっています。座学のみならず、高知市の護国寺での座禅体験、大自然の中で小中一貫教育を行っている土佐山学舎での児童・生徒らとの交流、香川県の金刀比羅宮の参拝やうどん作りの体験のほか、土佐清水市では日本人で初めてアメリカに留学したジョン万次郎の資料館を訪れました。最終の授業では、「ケールジャパン」と「高知の活性化」についてグループ毎にプレゼンテーションを行い、約5週間の学びを共有しました。



▲座禅体験する留学生



▲高知大学生と短期留学生によるグループワーク

授業公開週間「FD・SDウィーク」を実施

6月12日から7月31日の間、平成29年度FD・SDウィーク(授業公開週間)を実施しました。この取組は、従来の相互授業参観を拡大し、全学部同時期に授業を公開・参観するという試みで、平成28年度大学教育再生加速プログラム(AP)の採択を機に始めたものです。

今年度は、42科目延べ99授業が公開され、教職員約350名が参観。授業公開教員及び参観教員の授業改善並びに職員の大学教育への理解の促進等を主とした教職員の意識改革を目的に実施しており、参観者からは「他の教員の講義を聴く機会がなく、こうした取組があると参加しやすい」、「他の教員の授業を聴くことは、とても有用であった」、「事務職員の立場で、授業に参加できる機会は少なく、非常に貴重な経験になる」といった声が寄せられました。



▲授業参観の様子

高知大学で開催するイベントをご紹介します。

イベントインフォメーション

2017 秋号
Autumn



11月3日(金・祝)・4日(土) 朝倉キャンパス「黒潮祭」

「黒潮祭」のテーマは、Serendipity(偶然、幸運な発見)。イルミネーション点灯、出張街路市、サークルや学生団体の成果発表、模擬店、音楽等の各種ステージなど、今年も沢山のイベントを企画しています。皆さんの来学をお待ちしています。4日(土)はホームカミングデーと同時開催です。

時間 3日(金・祝)…10:00～19:00
4日(土)…10:00～17:30

場所 高知大学朝倉キャンパス
TEL:088-844-8149



11月3日(金・祝) 物部キャンパス「一日公開」

今年も教育研究活動の一端を皆様にご紹介するべく開催します。畑や果樹園、黒潮の恵み販売や人気の芋ほり、トレーラー体験コーナーをはじめ、老若男女、お楽しみいただける催しがたくさんあります。ぜひお問い合わせのうえ、お越しください。

時間 9:00～15:00 **場所** 高知大学物部キャンパス TEL:088-864-5114



11月4日(土)〈第8回〉 ホームカミングデー

久しぶりに母校を訪れてみませんか?在学生・教員との交流をはじめ、各学部で様々なイベントや記念講演を行います。皆様のお越しをお待ちしております!



〈記念講演〉

講師 国連パレスチナ難民救済事業機関:UNRWA
清田 明宏氏

演題 「高知から世界へ・世界から高知へ」
【場所】高知大学朝倉キャンパス

※詳しくは「高知大学総務部総務課」まで TEL.088-844-8116



メルマガ
配信中!

月2回配信(第2・4金曜日)

高知大学からメルマガジンを配信しています。本学ホームページの「入試情報」→「メルマガの登録はこちら」へ!

<http://daigakuji.jp/kochi-u>



●お問い合わせ先 皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。



高知大学
Kochi University

高知大学総務課

高知大学 検索

<http://www.kochi-u.ac.jp/>

TEL.088-844-8643 FAX.088-844-8033

〒780-8520 高知市曙町2-5-1 E-mail:kh13@kochi-u.ac.jp

2017年度 定期公演

11月12日(日) 高知大学吹奏楽団

第35回 高知大学吹奏楽団定期演奏会

時間 開場17:00/開演17:30 **場所** 高知県民文化ホール(オレンジ)

12月3日(日) 奇術部 Trick or Treat

第17回 マジシャンズパーティー

時間 開場18:30/開演19:00 **場所** 高知県民文化ホール(グリーン)

12月23日(土・祝) 高知大学演劇研究会

第46回 高知大学演劇研究会定期公演

時間 未定 **場所** 蛸蔵

12月16日(土) 高知大学合唱団

第46回 高知大学合唱団定期演奏会

時間 開場12:30/開演13:30 **場所** 高知市春野文化ホールピアステージ

平成30年度 高知大学入試案内

推薦入試Ⅰ(出願期間)

平成29年11月1日(水)～6日(月)

人教 (教育学・教科教育・特別支援教育・保健体育教育)
理医 (看護) **農** (暖地農学、森林科学、生産環境管理学) **地**

人 人文社会科学部
教 教育学部
理 理工学部
医 医学部
農 農林海洋科学部
地 地域協働学部
さ 土佐さがけプログラム

推薦入試Ⅱ(出願期間)

平成29年11月 1日(水)～6日(月) **医** (医)

平成30年 1月16日(火)～19日(金) **教** (科学技術教育を除く) **農**

AO入試Ⅱ(出願期間)

平成30年1月16日(火)～19日(金) **さ** (生命・環境人材育成)

一般入試 前期日程・後期日程(出願期間)

平成30年1月22日(月)～1月31日(水)

11月25日(土)・26日(日)

〈第57回〉

室戸貫歩開催!

高知市の朝倉キャンパスから室戸岬まで約90km。
夜を徹して歩く!

一般の方も
ぜひご参加
ください



高知大学の最新情報を伝えたい

THE こうち
ユニバーシティ CLUB

FM 高知
81.6MHz

毎週日曜日 放送中
(9:30～9:55)

高知大学のHPから過去放送分も視聴できます!

http://www.kochi-u.ac.jp/outline/kouhou/radio_fm_kochi/

高知大学の教育、研究、地域貢献等の
ホットな情報をお届けします。

スポンサー企業
高知銀行/ソフテック

